

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

令和1年 7月 30日

所属部局・職	霊長類研究所・博士後期課程学生
氏名	石塚真太郎

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
アメリカ合衆国、シカゴ

2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
第56回動物行動学会・第36回国際行動学会・合同学術大会

3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
令和1年 7月22-29日 (7日間)

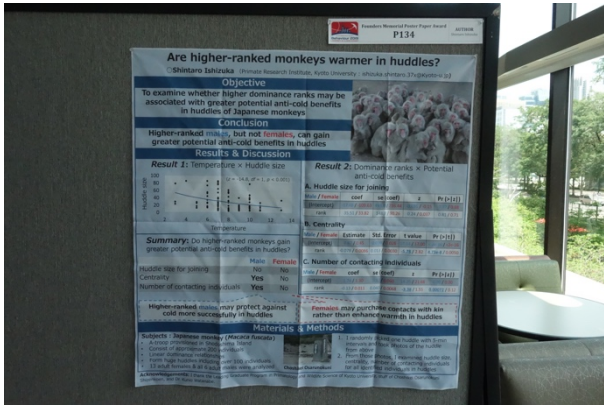
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
イリオン大学

5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。

2019年7月22-29日の出張で、シカゴで開催された第56回動物行動学会・第36回国際行動学会・合同学術大会に参加した。目的は、小豆島のニホンザルについての研究成果を発表すること、私が続けている集団遺伝学的研究と両立できるような行動学的研究のアイデアを得ることであった。

私はポスター発表のセッションで発表を行った。今回の発表では、小豆島のサルたちが形成する猿団子について話した。発表時間中、私のポスターを訪れる人は途絶えなかった。霊長類以外の研究者にとっても、小豆島で見られる巨大な猿団子のインパクトは大きいかもしれない。内容については、厳しいコメントをする人から、好意的なコメントをくれる人まで様々であった。他の研究者の意見を聞いたところ、不完全な部分もあるものの、発見自体は面白いと改めて感じたので、できるだけ早くに論文化できるように目指していきたい。

今回の学会で野生動物を対象としたものは比較的少なかった。また印象的だったのは、種名が含まれないタイトルの発表が多くあったことであった。以上のことから、聴く発表を選ぶのが比較的大変であった。実際に聞いた発表も、野生霊長類に適用可能か、集団遺伝学的研究との統合が可能か、という点では疑問が残るものがほとんどであり、その点では残念であった。とはいえ、発表自体は興味深いものが多くあり、様々な刺激を得られたことは良かった。今回の経験が、私のアイデアの一部となり、長いスパンで私の研究に生きてくれば良いと思う。



私のポスター

6. その他 (特記事項など)
この学会の参加にあたり、PWS リーディング大学院プログラムからの支援を受けました。PWS プログラム感謝申し上げます。